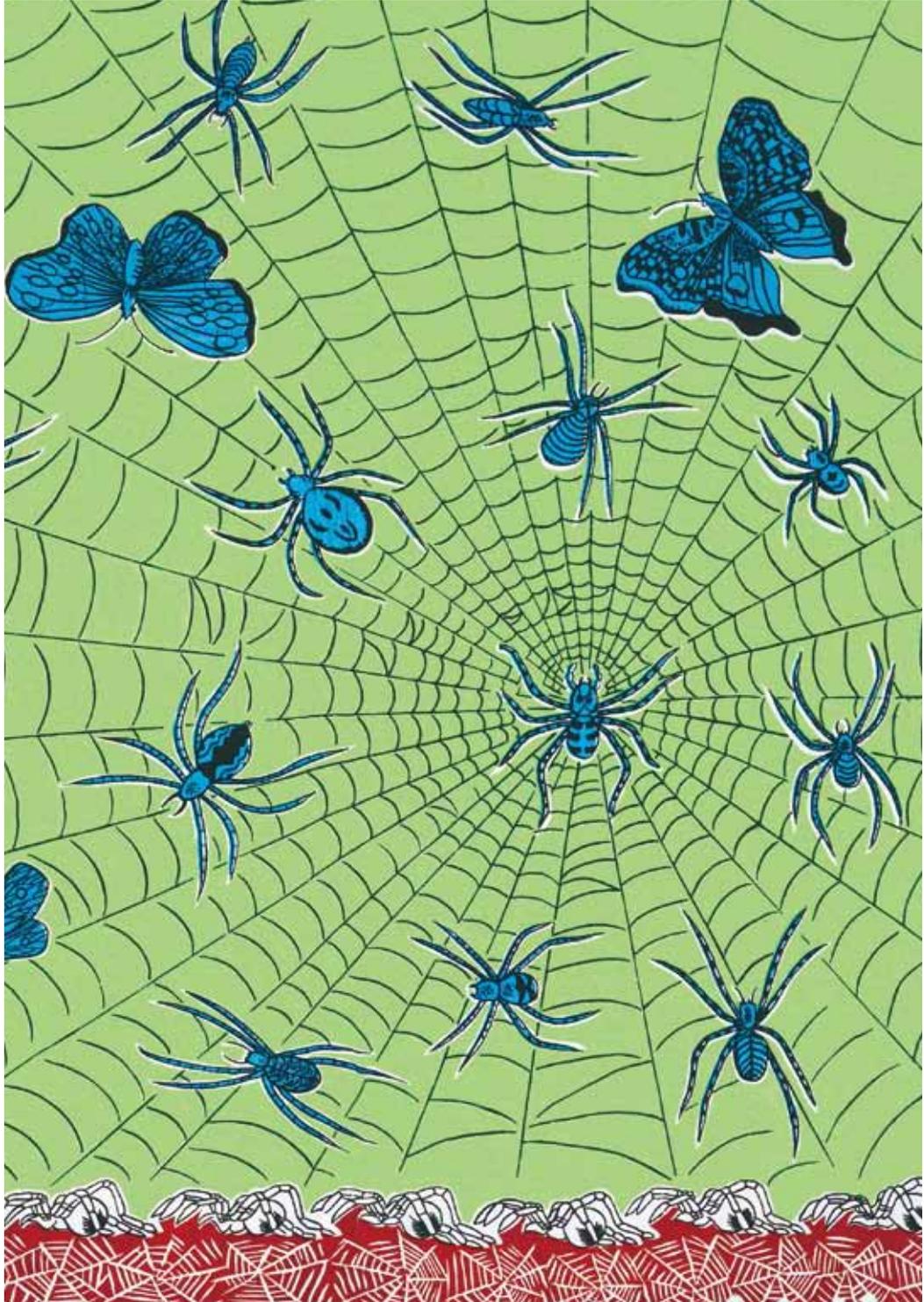


日常

のポエティックス



昭和二十一年アフリカに仕向け輸出された横浜スカーフ意匠(部分) / 横浜市工業技術支援センター所蔵

- 開会 ● 13:00
- 報告 ● 13:15~15:45
- 討議 ● 16:00~17:10
- 閉会 ● 17:20

趣旨説明 ● 挨拶 ● 西村清和 (藝術学関連学会連合会長)
 ● 山崎稔恵 (服飾美学会・関東学院大学)
 司会 ● 小池寿子 (美術史学会・國學院大学)

主催 ● 藝術学関連学会連合・参加学会・意匠学会 / 国際浮世絵学会 / 東北芸術文化学会 / 東洋音楽学会 / 日本映像学会 / 日本演劇学会 / 日本音楽学会 / 日本デザイン学会 / 比較舞踊学会 / 美学会 / 美術科教育学会 / 美術史学会 / 広島芸術学会 / 服飾美学会 / 舞踊学会 (五十音順)
 お問い合わせ ● 日本大学文理学部哲学研究室(藝術学関連学会連合事務局) / 〇三二五三七一九七〇二

報告 ●

- 茂手木潔子 (東洋音楽学会・聖徳大学) 「時間を測り 動きを揃える唄―越後酒造り唄―」
- 前崎 真也 (意匠学会・京都女子大学) 「素材が失われる時、工芸はどこに行くのか」
- 三澤 一実 (美術科教育学会・武蔵野美術大学) 「『旅するムサビ』がしてきたこと」
- 平芳 裕子 (美学会・神戸大学) 「針仕事のポエティックス―なぜ服は物語を紡ぐのか―」
- 大久保尚子 (服飾美学会・宮城学院女子大学) 「服飾にみる日常と芸術の接点―意匠の創案と享受―」
- 石上 阿希 (国際浮世絵学会・国際日本文化研究センター) 「春画の『日常性』」
- 中村 俊春 (美術史学会・京都大学文学部) 「17世紀ネーデルランドの風俗画に描かれた老人たち」

討議 ●

パネリスト：
 各報告者+矢野明子
 (国際浮世絵学会・ロンドン大学東洋アフリカ学院ジャパン・リサーチ・センター)
 コーディネーター：小池寿子 / 山崎稔恵

茂手木潔子 [東洋音楽学会 / 聖徳大学教授]

「時間を測り 動きを揃える唄 ―越後酒造り唄―」

日本酒の製造工程では1960年代まで必ず唄が歌われた。唄は「酒屋唄」「酒造り唄」と呼ばれ、「唄半給金」とも言われて作業工程に必須の存在だった。唄で作業時間を測り、作業の動きを揃え、声の勢いで作業の密度を測った。「酒屋唄」の実際を、発表者が記録した映像とともに紹介する。

東京藝術大学大学院音楽研究科修了。音楽学(日本音楽)。

前崎信也 [意匠学会・京都女子大学准教授]

「素材が失われる時、工芸はどこに行くのか」

工芸制作に用いられる素材の多くは、芸術としての工芸のために生み出されたものではなく、人々の生活のために生産されている。人々の生活と素材の関係という観点から、工芸の未来と工芸研究の役割について竹工芸の事例を中心に検討する。

ロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)博士課程修了、学術博士(美術史・ロンドン大学)。

三澤一実 [美術科教育学会・武蔵野美術大学教授]

「『旅するムサビ』がしてきたこと」

子どもたちの日常“学校”に如何に芸術を持ち込むか。芸術への理解や関心は体験でしか学ぶ事ができないと考えている。学生たちが学校の日常に入り込む「旅するムサビプロジェクト」では、学生自身の作品を子どもたちと鑑賞することで、子どもたちに芸術への扉を開いていく。

東京藝術大学大学院美術研究科修了。美術教育。

平芳裕子 [美学会・神戸大学大学院准教授]

「針仕事のポエティックス ―なぜ服は物語を紡ぐのか―」

ファストファッション全盛の今、流行は簡単に手に入るが、服を作るのは容易ではない。物語『繕い裁つ人』に登場する仕立屋から産業革命のお針子像、さらに現代ファッションに触れながら、服を作ることの今日的意味について「針仕事」を軸として考える。

東京藝術大学、東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。表象文化論、ファッション論。

大久保尚子 [服飾美学会・宮城学院女子大学教授]

「服飾にみる日常と芸術の接点 ―意匠の創案と享受―」

今日、意匠創案は専門家に委ねられているが、過去に溯れば生活者の意匠への関与は身近な服飾にもみられた。江戸後期の美術や芸能、文芸の享受と一体化した意匠創案を楽しむ文化と、その系譜を通し、生活者の意匠への関与、日常と芸術の接点について考える。

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科・単位取得退学、博士(人文科学・お茶の水女子大学)。服飾美学、日本服飾史。

石上阿希 [国際浮世絵学会・国際日本文化研究センター・特任助教]

矢野明子* [国際浮世絵学会・ロンドン大学東洋アフリカ学院 (SOAS) ジャパン・リサーチ・センター
リサーチ・アシリエイト] (討議のみ)

「春画の『日常性』」

春画は人間の性という普遍的な主題と日常生活の場面を多用する傾向から、「現実」と「表象」との境を見定めるのが容易でない。その複雑な特質を、理想・娯楽・諷刺・祝祭・商品としての出版物・検閲などのキーワードを手がかりに考察する。

立命館大学大学院博士後期課程修了、博士(文学)。近世文化史。

* 慶應義塾大学大学院博士課程修了、博士(美学)。日本美術史(中近世絵画史)。

中村俊春 [美術史学会・京都大学文学研究科教授]

「17世紀ネーデルランドの風俗画に描かれた老人たち」

17世紀ネーデルランドの風俗画には、当時の道徳観を反映したさまざまな寓意が込められていることが多い。風俗画のなかでも特に老人を描き出した作品に注目し、老人とは如何なる存在であるべきと考えられていたのか、「人生の階段」という見方にも照らし合わせて考察を試みる。

京都大学大学院文学研究科・美学美術史学専攻・研究指導認定退学、博士(文学)。西洋美術史(17世紀ネーデルランド絵画)。

日常のポエティックス

日々のありのままの営みをとらえ、場所に溶け込み、時間を旅し、人と出会い、そうしてこころと身体を覚醒させてゆく――近年の芸術表現に顕著なありようが、芸術の研究に省察や新たな認識を示唆しているように思われる。

振り返ってみれば、そもそも芸術において人間を取り巻く環境や人びとの暮らしが映し出されぬということはなかったのではないか。それらが積極的に主題として提示されたか否か、時代様式やジャンルに左右され副次的余白的なものであったかどうかということはあるにしても、馴染み深ささまざまな「日常」(ordinary life)が、かつて不在ということではなかっただろう。

興味深い問題は、享受し解釈する側が、そこにどのようなまなざしを向けてきたのか、にある。それらの描写や表現を生み出した社会や集団にとって、それらがいかなる意味をもち、そこに人びとのどんな思いが投影され、イメージが想起されたのか、欲望、喜びや悲しみ、驚きや恐怖、快楽や苦痛、まさに生きた人間の現実にたいし、社会や人間との関係性について、どのような洞察や解明がなされてきたのか、という点である。

一方、生活の現場では、日々の営みや体験が美的行為に関わり、目を見瞠るような場面に遭遇することがある。たとえば装いや料理、インテリア、ガーデニング、観光など。これらは各人がそれぞれの仕方や流儀にしたがい営む行為であり、豊かな感受性が直観することのうちにその美を深めてゆくものと考えられる。だが従来、こうした感覚や経験のレベルに属する問題は、研究の脇に追いやられる傾向にあったのではないか。

芸術の「主題」としての日常、芸術が生まれ培われる「坩堝」ともいえる日常、芸術の美や解釈において言説の深淵にそれとなく影を落とす「感性」や「経験」の機微・肌理など、複雑に重層する日常の風景やその眺めを「ポエティックス」という言葉に託し語り合う。

主催 芸術学関連学会連合
(参加学会：意匠学会 / 国際浮世絵学会 / 東北芸術文化学会 / 東洋音楽学会 / 日本映像学会 / 日本演劇学会 / 日本音楽学会 / 日本デザイン学会 / 比較舞踊学会 / 美学会 / 美術科教育学会 / 美術史学会 / 広島芸術学会 / 服飾美学会 / 舞踊学会 五十音順)

日時 2015年6月13日(土)
13時00分～17時20分

会場 京都国立近代美術館講堂
京都府京都市左京区岡崎円勝寺町
<http://www.momak.go.jp>
参加費 無料

お問い合わせ先
日本大学文理学部哲学研究室(芸術学
関連学会連合事務局:03-5317-9702)